

地区協・あれこれ

地域交流分科会 施設見学会
「新国立劇場バックステージツアー」

日時：2月2日 10:00～11:00

場所：新国立劇場

新国立劇場には、大・中・小の3つの劇場がありますが、今回は、大劇場（オペラパレス）を案内していただきました。このオペラパレスは、日本唯一のバレエ・オペラ専用の劇場であり、従って、オーケストラピットも備え付けになっています。

まず、新国立劇場のエントランスから大劇場入り口前のロビーで今シーズンのバレエ・オペラの演目の説明を受け、大劇場のホワイエに入りました。ホワイエの大開口から外を見て、正面にある壁は、高速道路の騒音対策でもあり、池の水とその下にある石も、地下鉄の騒音や振動を抑えるためでもあるという美と音にこだわった建物になっているというお話をしました。

次に、客席にはいり、世界の著名な歌手や演奏者から絶賛されているという大劇場の音響にこだわった木製の椅子や壁のお話のあと、オーケストラピットを見下ろしながら、やはり音響のため、演目によって床の高さを調整するお話を伺いました。

一度、地下1階の楽屋の通路に行き、その後、舞台の上に上がらせていただき、これも日本唯一の大きさという30mもの天井をみあげ、前後左右4面構造になっている舞台の広さに驚きながら、特に今上演中の『蝶々夫人』のセットの上から客席を見渡しました。

最後に舞台上手の奥にある道具置き場で、簡単なものはそこで作ることもできる場所でもあり、舞台道具の搬入口でもある場所より劇場の外に出て、ぐるりと回り横の小劇場へも続くもう一つの入り口前にて解散となりました。途中、質問もあり大盛況でした。ご参加いただいた地域のみなさま、ありがとうございました。

※ 参加者アンケートより

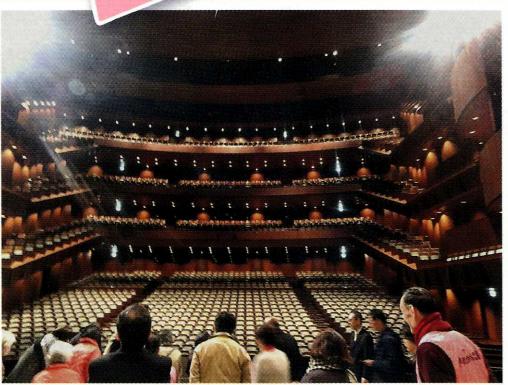
「今回は知らない裏を見学することが出来、ビックリ！入場料が高いのも納得。今度良い席でぜひミュージカルを観たい。」「普段見ることのできない場所を見学できて感激しました。」

安全安心分科会「新春の集い」に参加

日時：1月22日（日）11:00～14:00

場所：西新宿小学校

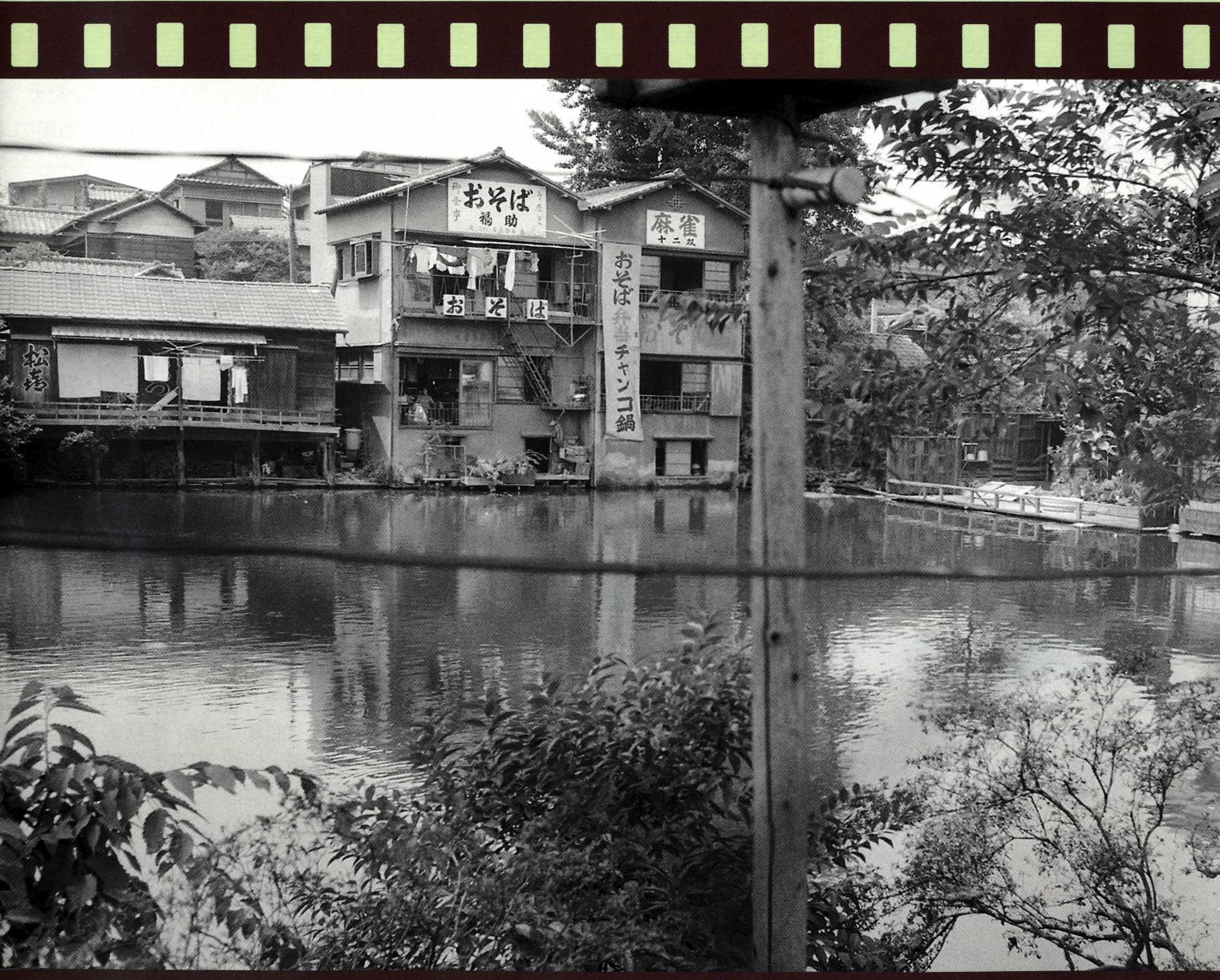
備蓄物資であるバーナーを使用した炊き出し訓練を行い、実際に災害に対応できる知識や知恵、技術、更には、自助・共助の心を習得することを目的に参加しました。



わいわい地域交流！

東京の中心、都庁のとなり、都会のオアシス
私たち地域住民のコミュニケーションをここから発信しよう！！

昔のはなしあれこれ



「十二社弁天池（昭和42年撮影） 新宿区歴史博物館所蔵」

【連絡先・発行元】

角筈地区協議会「地域交流分科会」事務局（角筈特別出張所内）

TEL : 03-3377-4381 FAX : 03-5350-2868 E-MAIL : tsunohazu@city.shinjuku.lg.jp

HP : http://wwwcity.shinjuku.lg.jp/soshiki/262200tunohazu_01.html

西新宿地域情報紙 わいわい地域交流！第42号 発行日：2017年4月1日

地元の方に昔のお話を聞きました



柴田有紀子さん 西新宿3丁目住

大正9年生まれの96才。戦時中、ビルマ（現在のミャンマー）へ兵糧という兵隊さんの食堂をなさっていました。状況の変化により、カンボジアの方へ1日40kmも歩き逃げて、その後、やっと日本に帰国されたとのことです。実は、ビルマで出会った兵隊さんと偶然再会し、ご結婚されました。戦後間もなく柴田さんは新宿の東口の闇市に屋台を出すことができ、川越や所沢まで芋を買い出しに行き、30kgもの芋を背負って帰ってきては蒸し芋を売り、また、結婚した当初は、着物などを売りながら生計を立てたそうです。（このことは、『よど六 Vol.2』平成7年12月20日発行の旧淀橋第六小学校の広報誌に詳しく掲載されています。）柴田さんは、昭和25年長女（今の『彦膳』の女将）を産んだ日に、今の西新宿4丁目に引っ越ししていらっしゃいました。その頃、そのご自宅から新宿駅の方を見渡すと、浄水場の向こうに伊勢丹と三越のマークの建物が見えるくらいの野っぱらで、すぐ左手は小西六の宿舎、右手は現在のワシントンホテルあたりに消防署の火の見櫓が立っているくらいでした。山手通り側の方は、すみれ幼稚園と双愛幼稚園があり、その先に富士山がよく見えていたとのことです。十二社池の周りには、「花街」があり置屋から芸者さんの叩く太鼓と、三味線の音が聞こえる風流な面もあったそうです。また、明治神宮へ続く十二社通りには平行して小川が流れています。そこではザリガニ取りもでき、蛍も飛んでいたそうです。水路でなくなった水道道路では、子供たちが粘土などを取ってよく遊んでいたそうです。

余談ですが…柴田さんは、運命鑑定士をなさっていました。お相撲を取る前の「はっけよい（八掛良い）」の掛け声は、占いの「八卦見」が語源であること、また、立ち合いで土俵に手を付くのは、大地の力をもらう意味があること、教えていただきました。

（聞き書き：M・M）



丸澤一也さん 西新宿4丁目住

昭和5年2月3日生まれの87才。丸澤さんは神田で生を受け、5歳の時十二社（現西新宿四丁目）に移住。淀橋第六小学校卒業後高等学校に入学、在学中より義勇軍の募集に応募、高等小学校を中退し、1944年（昭和19年）3月第7次満蒙開拓青年義勇軍に参加、同年3月茨城県の内原訓練所に入所した時は14歳の春でした。1945年（昭和20年）3月満州の訓練所に移りました。5月には遼陽の383部隊の後方要員として、農作業や警備を行ったそうです。



終戦後1946年（昭和21年）7月、当時16歳、福岡県博多港に引き揚げ、新宿駅はホームと屋根の無い鉄骨むき出しで付近は焼け野原、瓦礫が積み重なり家らしい家などありません。両親はいないと思い、母の実家の木更津へ向かいました。祖母から、まだ新宿にいる、との話で再び新宿に戻りました。家は駅の西側の方角でしたので、瓦礫の重なる細い道を通り、自分の住所らしい場所にあった焼けタンを張り合わせた掘つ立て小屋を開け、「ただいま」と声をかけると、薄暗い中から父が出てきて、声も出さずに手と手を握り合ったそうです。翌日は母と会い、やはり黙って手を握り合いました。

現在丸澤さんは、平和祈念展示資料館（新宿住友ビル48階）にて、戦争体験者の語り部ボランティアをされています。

明治20年代ごろまで熊野神社近辺には滝があり、この滝の水は弁天池に注いでいました。また、明治の頃は戸戸天神、向島土堤、王子の滝とともに熊野の滝と弁天池は人々の物見遊山の場所でした。昭和の中頃までは、池の周囲に多くの料亭があり、十二社花街として知られていました。



造成中の新宿副都心（昭和42年12月）



新宿駅西口バスターミナル（昭和39年8月）

石井稔さん 西新宿5丁目住



昭和3年3月生まれの90才。戦争末期の空襲が激しいなか成子天神の近くから、従業員50人以上の合成樹脂（ダイカスト）工場を営んでいた兄を失いました。石井さんはこの苦境を次のような工夫をして乗り切りました。

1. 電気が来ないので、近所の東京電燈（現在の東京電力）変電所のトランスの油を利用して、ローターソク替わりに使っていた。
2. 炊事をしたりお風呂に入ったりするにはお湯が必要であるが、燃料がないので、同じく変電所に置いてあった古い木製の電信柱を引っ張ってきて、薪木の替わりにした。
3. いちばん困ったのは便所であった。地所の片隅に穴を掘り、掘立小屋を建てて便所を作ったが、容量が少ないのですぐに満杯になってしまった。その便所で用を足せるのは女性だけとし、男性はそこいらへんで用を済ませていた。
4. 入浴はどうしていたかというと、ドラム缶に湯を沸かしてはいたが、燃料が少なかったため三日に一度が精いっぱいであった。そこで銭湯を利用するわけだが、環六（山手通り）の方に「婦久の湯」という銭湯が一軒あったが、いつもラッシュアワー並みの混雑で、履き物や下着を盗まれて帰ってこられないことが度々あった。当時コインロッカーなどはなく、脱いだものはカゴに入っていた。だから湯船に浸かっていても、自分の脱衣かごを見張っているければならないわけで、苦労した。

戦争が終わって収入を得なければならぬので、石井さんは昭和23年ごろ、兄が残していたダイカストを作る機械自分で修理して、工場を再び稼働させました。なにぶん当時は物のない時代で、作ればすぐに売れてかなり儲かったらしい。もうひとつ。石井さんの住まいのすぐ隣はかなりの高台になっていますが、当時この台地は「へび山」と言いい、格好の子どもの遊び場になっていました。東京都水道局が管理していたこの高台は、淀橋浄水場から汲み出された砂利を積み上げてできたものです。昭和35年ごろ、水道局が分譲して宅地になりました。

（聞き書き：H・I）

わがまちの区境



昭和30年頃の新宿駅西口



十二社通り
(昭和40年頃、熊野神社前)



オペラシティと新国立劇場との間に
ある大階段の通路。まさにその
中央部分は、渋谷区と新宿区との
区境である。（ガレリア）



区境